

## 対話的授業論メモ 12-「問い論的対話論」の一般的な意義について

宮崎清孝

東洋経済 online に載っていた刈谷剛彦氏（教育社会学・オクスフォード大学）のインタビュー：

『日本人は過去 150 年の経験を生かし切れてないー刈谷剛彦さんが語る「知に対する謙虚さ」の意味』

<https://toyokeizai.net/articles/-/409411>

を読んで、同感するところが多いとともに、私たちの言う意味での対話の意義についてあらためて考えるところがありました。

1,

刈谷氏の話は直接にはコロナについて、そこで私たちのとるべき知的態度についてです。その前半を中心に簡単にまとめると、

コロナをめぐる状況は、医学的な感染症対策にしても、その社会的、経済的な影響にしても実に複雑で、私たちにとって未知のことが多い。いわば答えのない試験のさなかに、私たちはいるようなもの。だからこそ私たちは、つい単純明快な答えをほしがりますが、これは危うい。知的な謙虚さが大事だ、

というものです。（後半は教育政策論ですが、これについては以前「対話的授業論メモ 5」で紹介してあります。）

コロナばかりの話ではないでしょう。地球温暖化にしても、トランプ支持者問題にしても、あるいはシャッター通り商店街の振興といった問題にしても、絡んでくる要因、利益関係がきわめて複雑で、単純なあれかこれかという発想では正しい対処ができない、というのが、この世の実際の問題でしょう。一つの正解を得たいという気持はもっともでも、きちんと考えるとそれがなかなか難しい、ということです。

2,

このことは翻って考えてみると、「私たちの考える」対話論の一般的な（教室内だけの話でない）意義に通じるのではないのでしょうか。

「私たちの考える」対話論の特徴はなんでしょう。

「問い」から考える、というものでしたね。一見誤った、おかしな考えの背後にも、実はそれなりの（知的な）問いがあるのだ、その発見と吟味が対話ということなのだ、というものです。

もっと広く言うと、一つの「問題状況」（それについて人が問いを持つ出来事・対象）について無限の問いがありえる。同じ人でもその時々で（その人のその時の「わがりの基盤」に基づいて）、違う問いを持つことがある。その、自他の異なる問いに気づいて、それぞれの問いの意味を吟味していくことが対話、ということです。

ここで問いとは、問題状況にどういう方向からアプローチしていくのか、ということです。問いが違ふとは、その方向が違ふ、ということです。自分のアプローチの方向に気づき、同時に他の人の、自分とは違ふアプローチの仕方に気づく、それらを深めていく、ということです。自分のものについては、「そうか、気づかなかったがこう考えていたんだ」と自覚し、「もっとこう言えるよな」と展開していく。他者のものについては「ああ、そういうことね」と理解し、「そういうことも確かに考えないといけないな」と考えていくこと。

3,

これに対して一般的に「対話が大事」というときの対話とはなんでしょうか？ 日本人には対話力がもっと必要、なんていう場合には何が意味されているのでしょうか？

単に情報交換をもっとしましょう、というような意味合いもあるでしょうが、もっと積極的には、「きちんと自己主張をして、議論をしよう。その上で合意しよう」ということだと思います。

そのためには、一つの問いを明確にして共有することが大事。お互いに議論を尽くして、それぞれの正しさを証明し合い、その結果をみんなで納得して一つの結論を得る。

みんなで対話のルールを共有する（ちゃんと説明する・強引に主張だけしない、といった）。お互い最終的には納得するようにする。等など、それ自体として結構なことではあります。結構なことではあるのですが、私たちから見ると、これは結局、自分たち（対話参加者）の中に潜在的にある様々な問いを、明確化といって一つだけにしてほかを切り捨て、それに対応して一つの答え（みんなが納得するという意味で、「正解」といいでしょう）を得ようとするものです。

4,

この2つの違いを、1の話と関係づけてみましょう。現実の問題は複雑で未知の部分も多く、一つの正解をすばっと得られるようなものではない、というのが1の話です。言いかえると、3 的な対話論、納得を尽くした議論をして一つの答えを得る、という、その言い方は結構でも実際にはそれは不可能なことが多いのが、現実社会の本当の問題ではないか、ということです。つまり選択肢が複数あるとして、どれもそれなりに（異なる理由で）正しい、というのが現実の問題です。

でも、「どれもそれなりに（異なる理由で）正しいと考えることは面倒です。どちらかに

してしまいたい。そこでそれぞれの選択肢の支持者は、自分が正しいという理由を挙げて、証明する。でも他の選択肢も（異なる理由で）正しいので、結局不毛の対立になる。自分なりの「科学のやり方」を振り回してたたき合う。勢力の強い方が勝つ。しかもそれは、自体の複雑さを反映していないので、結局は不適切な結論になってしまう。

「日本人の弱い議論する力を高める」ための対話論は、結局こういうところに陥ってしまうように思います。

5,

これに対して私たちの「問い論的対話論」からはどうでしょうか？

私たちが問題にするのは、「相手を説得する」ことではなく、「相手はどんな問いを持っているのか」わかろうとすることです。（これは同時に、「私はどんな問いを持っているのか」をわかろうとすることでもあります。）つまり、相手は（自分は）どんな方向から問題に迫ろうとしているのか聴き取ろうとするわけです。これは別の言い方をすると、問題の複雑さを、相手に助けられて知っていく、ということでもあります。

「相手に助けられて、問題がよりわかっていくことがある」ということの意味、これが、刈谷氏のいう「知的に謙虚」ということの意味、積極的な内実だと思います。

6,

「相手はどんな問いを持っているのか」わかろうとすることは、相手の考えを全部認める、合わせる、というのとは違う。

相手はこの問題をこういう方向から考えていたのだ、とわかろうとすること。

それにより、自分がどういう方向から考えているのか、わかること。

相手の考えている方向（問い）により問題の複雑なあり方をわかること、

それによって自分のわかりをさらに進めようとする。

「それによって自分のわかりをさらに進める」とは、他者の問いに触発されて、自分の問いを新しくしていくこと。問い続けること。

対話が終わらない、とはそういうこと。

7,

これは相対主義ではない。どんな答えでも OK というのではない。まずその背後に問いがあるかどうか。問いがあったとして、「その問いなら、その考えはわかる」というのが対話的姿勢。私の問いはこうだった。その問いとあなたの問いの関係はこうだね、というように展開していく。

でも相対主義ではない。その問い（からその答えはもっともなのだが、でもそれ）よりも、ここではこの問いの方が大事なのだよ／この問いが扱われていたのだよ、ということはある。→てふてふ。チョウチョが”正解”には違いない。読み方が問題だったから。

また、問いはわかったしもっとも。でも問いからの展開に問題があったよ、ということもあるだろう。